

# 子どもに発明・発見させる幼稚園

——アメリカ、イリノイ大学附属幼稚園  
Child Development Laboratory での実践(3) —

結城（田村） 恵

イリノイ大学附属幼稚園、CDL ( Child Development Laboratory ) では、子どもに発明・発見をさせる教育を目指し、そのため、教具の選定、活動の構想、展開の方法等の決定は、ひとりひとりの子どもの活動を評価しながら行っている（三月号、七月号参照）。では、CDLでは、どのような方法で“ひとりひとり”的子どもの評価をしているのか、実践例を挙げながらまとめてい。

CDLでの子どもの評価では、第一に、教師が活動センターを受け持ち、その活動センターに来た子どもの活動の特徴を観察することと、第二に、教師同士が子どもの活動の様子について積極的に話し合っていることが、特徴として挙げられる。子どもの活動を評価する内容は、「何をしたか」「なぜそういうことをしたか」「どう指導に生かすか」の三つの観点からの検討することを強調している点が注目された。

### 活動センターでの観察

C D L の教室の構造は、様々な活動内容のセンターを、子どもが自由に行き来して遊ぶという、オープン形態になっている。この活動センターには、ごっこ遊び、ブロック、読書、美術、社会、科学、算数、運動のセンターがある（三月号、P 20 図1参照）。各教師は、もう二つの活動センターを受け持ち、そこに来る子どもの活動を、子どもとかかわりあいながら観察している。

写真1は、ブロックセンターでの活動である。この日のブロックセンターのテーマは、『動物園』だった。教師は、動物のポスターを周りに貼つたり、動物のおもちゃを置いて、雰囲気を作つた。そこでの子どもの活動は、まさに十人十色であった。動物のポスターを見て、その名前を教師に尋ねた子どももいた。写真右端の子どもは、動物園の『おり』をブロックで作つたあと、その中に動物のおもちゃを入れていた。写真左端の子どもは、自分でハンドルの付いたブロックを取り出して、動



物園を案内するバスの運転手になった。一人で遊ぶ子ども

ももいれば、他の子どもに指示を与えて、自分の遊びに引き込む子どももいる。教師は、このセッティングの中で、それぞれの子どもがどのような遊び方をしたかを観察し、子どもの特徴をとらえるのである。

この観察の方法の有効な点は、教師が活動センター全体を一度に見渡すことができる、それゆえに、子どもがいまどのレベルにあるか、どんな個性を持ち、どう伸ばしていくべきよいかに対し、教師が十分に目配りできるこ

とである。筆者が、他に観察した幾つかの幼稚園では、

子どもの数を教師の数で割って、その同数分の子どもを受け持ちの子どもとして、全体の活動の中でその子どもたちを観察するという方法が採られていた。つまり、自由に動き回る複数の子どもを、教室全体という視野で観察することになる。このような場合、受け持ちの子どもがどこにいるかを探すことに余分な力が使われてしまい、結果として、十分にひとりひとりの子どもを観察できなくなってしまう。

#### 積極的な教師間の話し合い

子どもが降園した後の十五～二〇分間は、必ず教師全員が集まって、その日の活動について感想、意見などを交換していた。自分の活動センターで観察した子どもが、他の活動センターではどのような遊び方を展開していったのかを聞きながら、その子どもがバランス良く、諸領域の活動に参加しているかどうかをチェックしていく。また、指導方法の有効だった点、改善すべき点などを挙げて、今後の指導方法の検討をしていた。

また、各教師は、「週間報告書（*weekly journals*）」を毎週月曜日にヘッドティーチャー（主任教師）に提出することになっていた。自分の観察した子どもの活動の評価や、活動内容に関する感想や意見をまとめたものである。この報告書を通して、日々のミーティングでは十分にできない、長期的、総合的な子どもの活動評価を行っていた。

さらに、これらの活動の記録は、ヘッドティーチャーによってそれぞれの子どものファイルに分類・整理され

ていた。このファイルは、学期末に子どもの発達の様子を総合的にとらえるための資料とし、また父母との面接にも活用されていた。

#### 実践例「週間報告書」から

以下に挙げる文は、室内運動場で「風船」遊びを観察した、教師による週間報告書の一部を訳したものである。室内運動場の中心には、子どもの肩くらいの高さの仕切りが置いてあった。隅のテーブルには、約五〇個の風船が置かれ、子どもたちは自由にテーブルにやってきて、風船を膨らませていた。

9／19 一九八四 (水曜日)

#### 「風船」

——室内運動場——

Will : 風船を何度もたたけるかに挑戦していた。何度も繰り返すうちに、力を加減してたたいている様子が観察された。弱くたたくと失敗も少なくなる」と、強くたたくと高く飛ぶが、捕まえにくくなる」と、強くたたくと高く飛ぶが、捕まえにくくなる」

Greg : 風船の膨らませかたを知らない Alex に、自分の風船を膨らませて教えていた。ところが風船の口を結ぶのに失敗したため、その風船が音を立て手もとから飛んで行ってしまった。その風船の音と Greg の興奮している様子に気付いた Joshua や Steve も、Greg のまねをして、どちらが遠く飛ぶか競争し始めた。しばらく競争が続いた後、Greg は、風船の口に手を当てるとき冷たい「風」が出ていくことに気がついた。

(中略)

この活動の中心的な目的的な、様々な筋肉を使わせる運動をさせることが目的であった。風船をたたく、蹴る、出来るだけ多くの風船を抱える等の動きにも、腕、手首、足、胴など全身を使う運動になっていた。それに、Will や

Rachel は、力をノハーネルすることによって、飛ばす高さを変化させる技能を体得していた。これは、風船が、子どもにとつてつかむことが難しく、空中をフワフワとゆっくり動き、形が変わるという特性を持つためだといえるだろう。今後は、室外でもこのような活動をやつてみたい。風の影響で風船の動きが変わることにより、子どもの身体活動が、より活発になると考えられる。

身体的活動以外にも、「風船」は様々な領域にわたる活動を刺激していた。風船の数を数える、風船をたたいてリズム遊びをする等の活動も観察された。また、Greg は風船の中の「風」(空気)に関心を持った。これらは、子どもの自然な遊びの中から生まれたものである。そこから、子どもが得た知識を考えると、子どもの自発性、あるいは遊びの持つハプニングを生かすことの大切さを実感した。

Greg の「風」の発見は、空気の存在を子どもに経験

させるうえで重要な出来事であった。これを生かした遊びを考えてみたいと思う。よいアドバイスがあれば、宜しくお願いします。

#### 何を評価するのか

この週間報告書から次のようない特徴が読み取れる。まず、ひとりひとりの子どもが「なにをしたのか」を把握していることである。この時、結果として何ができるのかのみに注目するのではなく、そこまでの過程にも注目していた。例えば、「風船」の中心的な目的である身体運動をしたか否かのみに限定せず、他の領域の活動が展開されている様子にも注目していた。これはCDLが、ひとりひとりの子どもは異なる個人であり、考え方や行動や学習のペースも異なるという前提を置いているからだと考えられる。

やがて、観察した子どもの行動から、「なぜそういうことをしたのか」という子どもの思考を考察している。例えば、Will が何度も風船をたたいていたのは、「たた

くときの強さ」と「風船の飛ぶ勢い」との関係を体得し

ようとしていたことを考察している。また、Joshua や Stevie が、なぜ Greg の遊びに加わったのかについても推測してある。これは、子どもの行動の背景にある興味や関心が何なのかを見いだし、その遊びをどう発展させるかを考えるうえでも重要である。例えば、Will が何度も風船をたたいていたのは、「たく音」を楽しんでいたと推測される場合には、「その後に『どちらがたくせんたたき続けることができるか』という遊びにではなく、リズム遊びのようなものに誘導していただろう。

また、「どう指導に生かしていくか」という次の活動への方法を模索していることも注目できる。子どもの活動の結果が、教師の期待以下であった場合、教師の指導方法に問題があるとして、教材や活動の展開方法を再検討していた。子どもの活動の結果が、教師の期待以上のものであった時でも、その原因を考え、次の活動へ適用する方法を模索していた。

#### CDL の評価の方法・内容の意義と課題

小此木啓吾氏が『いろいろの進化』(注) のなかで、「なぜ、そういうことをしたのか」を考えるとき、まず人の話を聞くことが重要であることを指摘している。例えば、「おいしいアイスクリームが出されたのに、ひとりだけ食べない子どもがいた。それはなぜか。」という問い合わせがある。これに対して精神分析の立場からは、次の五つの理由が考えられるといふ。

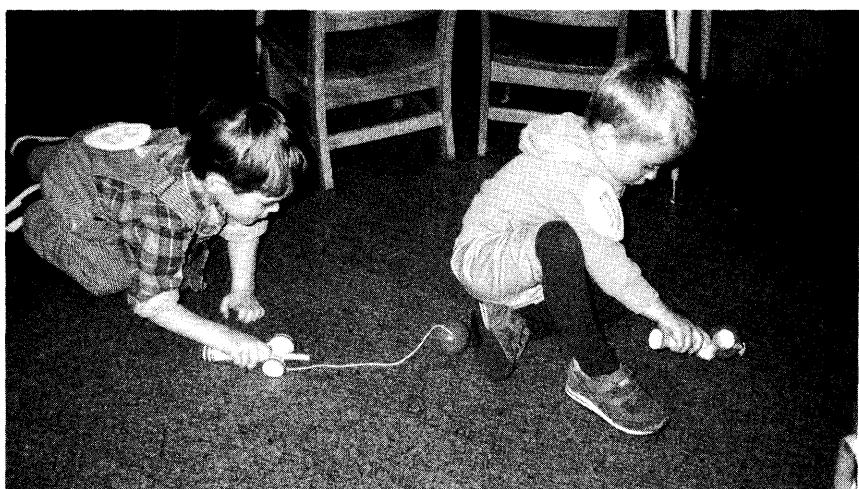
第一に、その子どもには、もうアイスクリームもたくさん食べてしまっていて、食べる気がしなかった(「欲求がない」)。第二に、甘いものを食べてはいけない、と注意親の許可なしに勝手にものを食べてはいけない、と注意されているから食べなかった(「超自我」の働き)。第三に、食べるとまずいことが起こるという、その時の状況から食べなかつた(「自我」の働き)。第四に、「いい子は間食をしないで、ご飯をたくさん食べるべきだ」など、自分にあるべき原則を課して食べない(「自我理想」の働き)。第五に、「太りたくないから」「食べない

方がカッコいいから」など、自己イメージを保つために食べない（「理想自我」の働き）。

これらの理由のうち、どれが行動として現れているかは、本人に聞いてみない限り結論できない。しかし、本を本当に理解するには、行動の理由を聞くことは必要不可欠のことである、というのである。

同様に、幼児教育と場面、即ち幼児の活動（遊び）の場面でも、子どもが「なぜ、そういうことをしたのか」を考えることは、子どもを理解するうえで必要不可欠なことである。しかし実際には、様々な活動が連続的に展開されているので、一々子どもに聞いていく訳にはいかない。しかも、ひとりひとりの子どもの活動について考えていくには、相当の労力と工夫が必要になるだろう。さらに、その連続的な活動をより意義のあるものに発展させていく刺激を、教師は与えていかねばならない。

CDLの実践は、これを実現させる一つの方法といえ



CDL式ケン玉遊び

3歳前後の子どもにとっては、赤い玉の穴の中に、一方の突き出た棒を入れることに興味がある。その遊びにもなかなかの技術がいるようだった。

るだろう。しかし、実際に自分たちの幼稚園や保育園に適応することが出来るかどうかは、幾つかの検討が必要になるだろう。

まず、教師には次のような資質が要求される。小此木氏が指摘していたように、ひとつ行動の背景にある判断基準を多角的に考え、そのうちどれが最も本人を理解する理由になっているのかを、観察から推論できなくてはならない。さらに、子どもの行動の評価から、より有効な指導方法を考え出す能力も期待される。

また、CDLでは、ひとりの教師が十分に観察できる子どもの数は約五人程度と考えて、教師の採用人数が決められていた。更に、子どもの活動の評価で「なぜそうしたのか」を考える際に、家庭での子どもの様子も把握する努力がなされていた。例えば、子どもが不機嫌で活動に参加しなかった場合に、活動内容そのものではなく、出掛けに親に叱られたとか、前日の夜に十分睡眠を取りなかつたというのに、問題がある場合があることがある。あるいは、家庭での長期的な問題を含んだ場合



**屋食** 時には、ベランダへ机を出して昼食をとる。コップにジュースを入れるのに悪戦苦闘する子どもも、食べ物の名前に関心のある子どもも、いつも片付けをしたがる子ども。子どもの興味・関心、そしてそこから学ぶことはひとりひとり様々である。

もあるので、放課後の父兄との話し合いや、父兄の活動への参加等の方法で、家庭との連携が図られていた。

このような点を考慮したうえで、各幼稚園の状況にあつた方法を工夫していかねばならない。

以上、三回にわたって、C D Lの教育を、実践例を中心まとめた。「教育の目的は、知識の量を増やすことではない。子どもに発明・発見をさせる可能性を創り出すことである」という方針に基づいたC D Lでの実践は、日本の幼児教育の方法にも様々な示唆を与える。

「読み・書き・算」をはじめとする知的教育をどう行えば良いのかということとも、我々の抱える大きな課題であ

る。この視点からも、子どもの興味・関心をひきおこし、活動の過程を豊かにする教具を与え、子ども同士の相互作用を重視しながら、子ども自身に発明・発見させていく、という方法から学ぶことは多いのではないか。日本での教育実践にそのまま適用することが困難な点も多いかと推測されるが、参考にしていただき、応用・改善して実践に生かしていただければ幸いである。

(注) 小此木啓吾『ここでの進化』CBS・ソニー出版一九八二  
p.66—68

(UNIDA インターナショナルスクール)

